CORE
Metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
Provided by DWCLA Academic Repository



研究ノート

# 同志社女学校デントン・ハウスの平面構成・室内意匠の復原的検討

[1] 赤　澤　真　理　[2] 中　西　美　香　[3] 田　中　厚　子
[1] 同志社女子大学・生活科学部・人間生活学科・助教（有期）
[2] 同志社女子大学・生活科学部・人間生活学科・2014年度卒業生
[3] アクセス住環境研究所・代表

# The Study of Restrative Planning and Design on the Denton House, Doshisha Girls' School

[1] Mari Akazawa　[2] Mika Nakanishi　[3] Atsuko Tanaka
[1] Department of Human Life Studies, Faculty of Human Life and Science, Doshisha Women's College of Liberal Arts, Assistant Professor
[2] Department of Human Life Studies, Faculty of Human Life and Science, Doshisha Women's College of Liberal Arts, Graduate
[3] Axess Residential Design & Research, Ph.D.

## はじめに

本論文は、女性宣教師 M. F. デントン（Mary Florence Denton）の住居であるデントン・ハウスを、図面・古写真・聞き取り等から平面図を復原し、平面構成・室内意匠の特徴を、近代日本住宅史の視点から明らかにする。デントン・ハウスは、1909（明治42）年から1960（昭和35）年までに、同志社女学校構内に現存した。現在の新心館（2015年９月竣工）の敷地に建ち、木造２階建住宅に和と洋の生活様式・室内意匠が融合する和洋折衷住宅であった。

明治期における木造洋風建築は、居留地や外国人教師の住宅として導入された。京都においてはその早い事例として、新島旧邸、旧ベリー邸等がある[1)]。しかし、デントン・ハウスについては、その全容は検討されていない。

## １．デントン・ハウスの概要

### 1-1. デントン・ハウスの建設

同志社女学校デントン・ハウスの建設過程は、坂本清音・林貞子『同志社女子大学寮の100年』（同志社女子大学史料室、2006年）にまとめられている[2)]。本書を基に、建設過程を以下に述べる。

同志社女学校は、1876（明治９）年、京都御苑内の柳原前光邸を借りた J. D. デイヴィス邸に始まり、「庭に面した最も美しい部屋３～４室」を使用した私塾であった。

1878（明治11）年、常盤井殿町に女学校最初の校舎（以下、初期校舎）、ベランダコロニアル様式の「京都ホーム」が建設された。校舎の二階部分には、二人部屋22室45名収容の寮があった。右翼上下階が女性宣教師用として確保され、他は生徒の宿舎と教場・集会所であった。窓は引戸風で、安価な木造家屋用の日本の塗料で塗られた（図１）[3)]。

1888（明治22）年、初期校舎の左翼部分（西半棟）に、食堂が拡張され、さらに１室３人収容の12室が増築され、寮部分は「平安寮」と呼ばれるようになった。

図１　同志社女学校最初の校舎（1878年）
（同志社社史資料センター蔵）

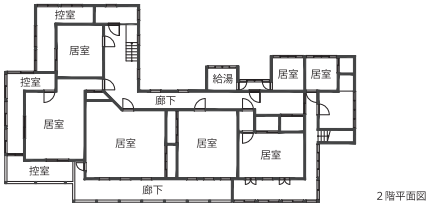
1909（明治42）年、初期校舎は老朽化により解体された。初期校舎の古材を使用して、新平安寮が建設された。いっぽう、デントンの居住した右翼部分は、デントン・ハウスとして、同志社女学校構内の北端に建設された（図２）。

1958（昭和33）年、新心寮を増築するために、デントン・ハウスは一部が取り除かれ、その後撤去された。この際の図面が現存している（図３）。図面をみると、改築後は、集会室の中央で建物が分断され、出入口が北から西へと変更されている（図４）。

## 1-2. デントンとデントン・ハウス

デントンは、1857（安政４）年にアメリカのカリフォルニア州ネバダ郡で生まれ、明治14（1881）年に同州パサディナの小学校教師として勤務した[4)]。明治21（1888）年に来日して以来60年、女学校に在任して女子教育に貢献し、多大な功績を遺した。デントン・ハウスが建設された1909（明治42）年から1947（昭和22）年にデントンが逝去するまで、デントン・ハウスはデントンが居住した。デントン・ハウスの二階は、1912（大正元）年まで、教室として使用された。その後デントン以外の外国人教師の住まいとして、また、ゲストを招く部屋・宿泊所として使われた。

図２　デントン・ハウス
（『同志社女子大学寮の100年』）



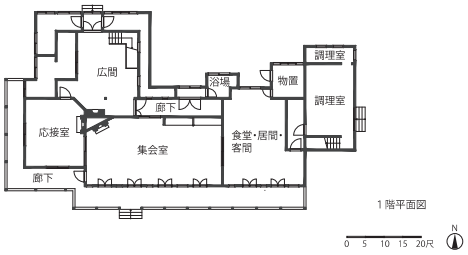
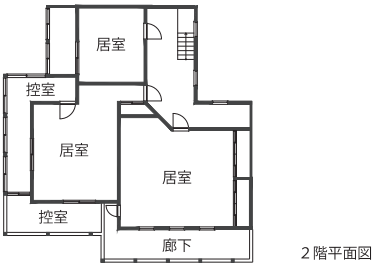




図３　デントン・ハウス改築前の図面
（1958年、同志社女子大学史料室蔵）から作図



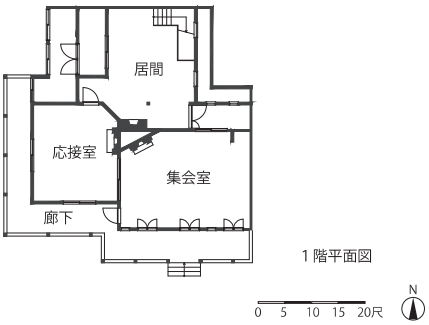




図４　デントン・ハウス改築後の図面
（1958年、同志社女子大学史料室蔵）から作図

デントン・ハウスは京都の社交の場のひとつとして、市内の宣教師及び西洋人の集会がたびたび開催された。米国の大学関係者、国内外の政財界人・文化人・芸術家が訪問し、また同志社の各種委員会、結婚式や披露宴の会場となった。訪問者には数多くの著名人が含まれているとされる[5)]。

## 1-3. デントン・ハウスに関する史料

デントン・ハウスの史料には、①デントン・ハウス改築時（1958年）の図面（同志社女子大学史料室蔵）、②古写真（本学元職員・山田健三氏による手書きの説明文あり）（同志社女子大学史料室蔵）、③F. B. クラップ『ミス・デントン「同志社の宝」と呼ばれた女性の60年』（同志社女子大学　同志社同窓会、2007年）、④現存遺品・家具等、がある。これに⑤居住された方の証言を加えて、復原を試みる。

本論文で使用した同志社女子大学史料室蔵の古写真は、元本学職員山田健三氏の書き込みに、「将来デントンハウスは再建する際のことを考え、■■原型を保たせたいとの主旨からこの写真撮影がなされた。写真には一寸した説明

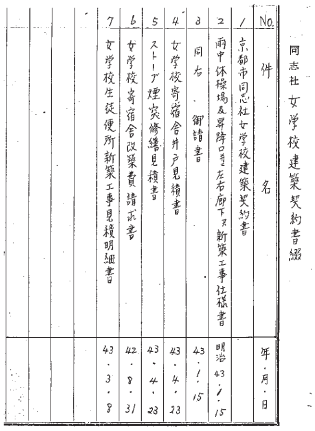
をしておいたが、建物の平面図立体図などが欲しい。新心寮第一期・第二期でデントンハウスは少しずつ虫喰され第三期建築の時すべてが取り除かれた。（山田健三氏記す）」とあることから、戦後の改築時に室内を整理した後に撮影された可能性が高い。戦前の室内の様相は、戦後よりも家具や物が置かれた状況であったことが、同志社社史資料センター所蔵の古写真から窺える（後述する図35等）。

## 2．デントン・ハウスの平面構成・室内意匠

### 2-1. 建築様式

新心寮（1957）建設の際に作成された図面から、木造２階建ての建物には尺寸法が使用されていたことが分かる。京都ホームの教師住居部分の古材を再利用して建設された。ベランダの高欄、居間の南側と北側の欄間に初期校舎と同様の意匠がみられる。すなわち、デントン・ハウスの建築的特徴は、1909（明治42）年建設であるが、1878（明治11）年の様相を踏襲することが貴重である。施工者は不明であるが、「同志社女学校建築契約書綴　明治42年」（同志社社史資料センター蔵）には、京都市の業者が記されている（図５）。新島旧邸と同様のベランダコロニアル様式であり[6]、正面と西側にベランダが巡っている（図６・図７）。ベランダに置かれたロッキングチェアに座るデントンを写した古写真から、ベランダの周囲には多くの植木鉢が置かれ、ベランダが活用されていた（図８）。

第二次世界大戦中、火災を引き起こす危険があったので、同志社はデントン・ハウスを取り壊すか、何らかの補修が必要であるとし、木造建築の外壁をクリーム色の漆喰で塗り、老朽化していたベランダの木製手摺を低い漆喰壁としたとされる[7]。古写真を検討すると、戦前期では、２階部


同志社女学校建築契約書綴

| No. | 件名 | 年・月・日 |
|---|---|---|
| 1 | 京都市同志社女学校建築契約書 | 明治43・1・15 |
| 2 | 雨中体操場及昇降口ヨリ左右廊下ヲ新築工事仕様書 | 43・1・15 |
| 3 | 同右　御請書 | 43・4・23 |
| 4 | 女学校寄宿舎井戸見積書 | 43・4・23 |
| 5 | ストーブ煙突修繕見積書 | 42・8・31 |
| 6 | 女学校寄宿舎改築費請求書 | 43・3・8 |
| 7 | 女学校生徒便所新築工事見積明細書 | |

図５　同志社女学校建築契約書綴　明治42年
（同志社社史資料センター蔵）

図６　デントン・ハウス外観
【ベランダにコンクリートの帯をなし、その他に補強したのは戦時中である】
【　】は、本学元職員・山田健三による説明文を示す。

図７　デントン・ハウス外観
【客間南側の縁側である。集会時は主にこの石段付出入口が使用される。】

図８　デントン・ハウス ベランダ
【ここから出入りをする。前庭からの入口である。集会などいつも左に廻ると台所入口に出る右端に見たところ。先方左に温室が見える。客間食堂外側の縁先を西より東に。】

（図６～８　同志社女子大学史料室蔵）

ベランダの天井も木製であることが確認できる（図９・図10）。以下、デントン・ハウスの平面構成・室内意匠を検討する。

## 2-2.　１階平面構成

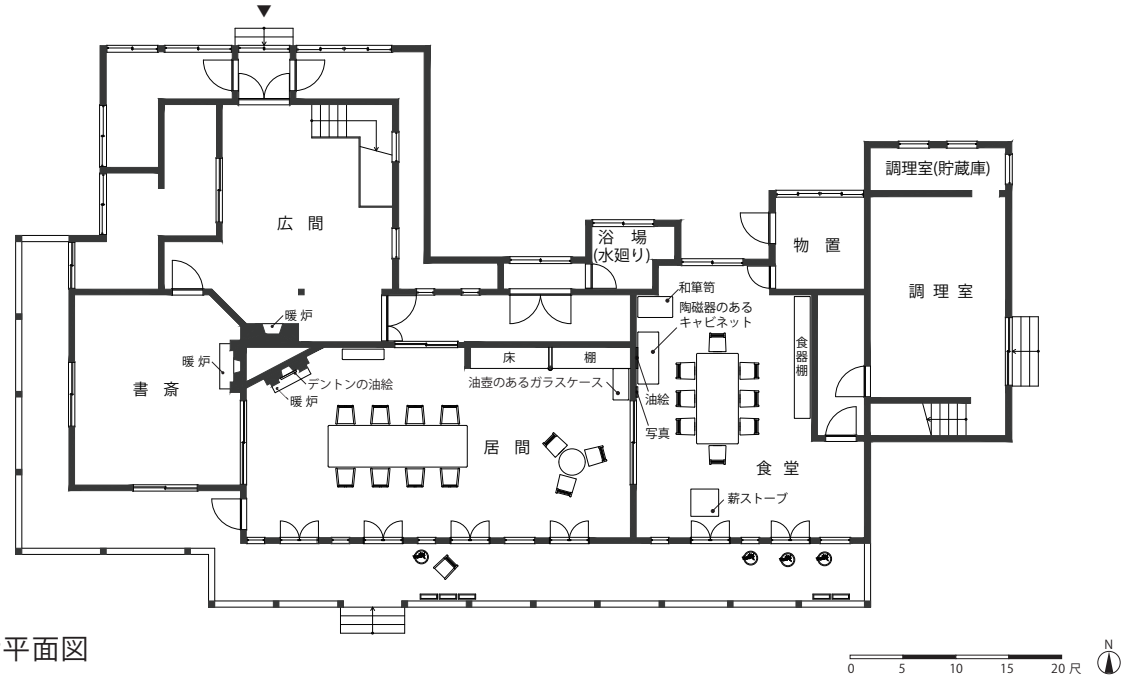
１階は、広間・書斎・居間等・食堂・調理室・物置等からなる。前述したように、①デントン・ハウス改築時（1958年）の図面、②古写真（本学元職員・山田健三氏による手書きの説明文）、③F. B. クラップ『ミス・デントン「同志社の宝」と呼ばれた女性の60年』を基に、平面図と家具配置図を書き起こした（図11）。平面構成として、東西に廊下を通して軸とし、南側に主室を設け、北側に洗面を配する。また、暖炉のある広間がある。広間は、ヨーロッパの邸宅のホールが縮小した空間とされている[8)]。洋風建築における片廊下型と広間型の特徴を有している[9)]。各室の詳細を以下にまとめる。

### １）居間（集会室）

１階の居間は、デントン・ハウスの中央に位置し、最も広い室であった。デントン・ハウス改築時（1958年）の図面には、集会室と示されている。古写真をみると、板張りの床に、棹縁天井など、木の素材が活かされた室内空間で

図９　デントン・ハウス 当初のベランダ
（同志社女子大学史料室蔵）

図10　デントン・ハウス ベランダ
（同志社社史資料センター蔵）




１階平面図

本図は、デントンハウス改築時（1958年）の図面に、同志社女子大学史料室蔵写真、F.B.クラップ『ミス・デントン「同志社の宝」と呼ばれた女性の 60 年』(同志社女子大学同志社同窓会、2007 年)の記述、現存家具等を基に作成した。部屋名称は、F.B.クラップ前掲書及び、改修時の図面の表記に従った。
双方に記載があった場合は、改築時図面の部屋名称を()で示した。

図11 デントン・ハウス想定復原図

あった（図12）。室の東西の両端に襖障子があり、催しの際には、襖を取り外して、食堂・集会場・書斎を一体に使用したとされる[10]。建具を取り外して空間を一体化して使用する方法は、日本の伝統的住宅の特質である。毎週日曜日、朝11時半から英語礼拝が開かれ、京都の西洋人が集まり、30人から60人の聴衆を収容したとされる[11]。

北西のコーナーには、斜めに暖炉が配置され、そのマントルピースの上の壁面にデントンの油絵が飾られていた（図13）。いっぽう、北面には絞り丸太がある床の間・違い棚を配置している（図14）。違い棚脇のガラスケースには、デントンが収集したと思われる油壺が置かれていた。このように、暖炉と和室の床・違い棚を同じ室内に配置した和洋折衷の造りとなっている。東側の居間と食堂の間の襖障子は、２枚組の引違いだが（図15）、西側は幅員から片引きの襖障子の可能性が高い（図16・図17）。

建具も和洋折衷で、南面は、ベランダに向かって、四カ所に床から天井までの両開きのガラス扉があり、その上部は欄間風のガラスになっていた（図18）。両開き戸の脇の壁面の上部は、細い木材でゴシック風の装飾を施したガラス嵌め殺し窓があった（図19）。いっぽう、両開き戸の上部には、日本の欄間彫刻を想起させる木材の雲型の装飾がある（図20）。これらの雲型の装飾は、初期校舎の京都ホームの外観にもみられる装飾である。

北側は中央に縦額を配した襖障子を使用しており、上部には南側及び西側と同様の雲形の欄間装飾が施され、統一された装飾となっていた（図21）。

居間に置かれている籐座の椅子は、現在、同志社女子大学史料室に所蔵されている（図22）。これはデントンに贈られた西洋の椅子に倣って日本で製作されたもので、１つはワシントン D.C. の友人に贈ったとされる。その籐座の椅子を実測し、図面に起こした（図23）。籐座の椅子は、新島旧邸に多くみられ、合わせて次稿の課題としたい[12]。

### ２）書斎（応接室）

書斎は古写真が少なく詳細は不明であるが、１葉の古写真によると東側に暖炉が設置されている。デントン・ハウス改築時（1958年）の図面には、部屋名称が「応接室」と書かれている。書斎の写真が発見されれば、課題としたい。

### ３）食堂

居間から襖障子を隔てて、食堂が配置されていた（図15）。部屋の中央に大テーブルがあり、食卓を囲んでいた写真も遺されている。オーク材のテーブルは引きのばされ、テーブルクロスはなかった、とされる。西側の陶磁器が飾られたキャビネットは洋風、奥には和箪笥がある（図24）。食堂東面には上部に絵皿を飾ることのできる和風の食器棚があり（図25・図26）、和洋の家具が一つの空間で融合していた。南側には蒔ストーブが置かれていた（図27）。食堂と考えられる古写真が数葉現存している。丸柱が立ち、居間とは異なる空間であることが分かる（図28・図29）。F. B. クラップの著作によれば、「1939年肺炎のときにベッドを食堂に移動した」とある。さらに、1947年12月23日、「食堂に何年も置かれているベッドを庭が見えるように南の窓側に移した」とある。図30の写真は1947年７月の状態と考えれば、食堂の南側以外のいずれかの部分（北側か）と考えられる。

### ４）暖炉

西洋住宅に欠かせない暖炉は１階の３室に設置されており、煙突はまとめて一つであった。北側広間の暖炉は、カリフォルニアのバンガロー住宅や、軽井沢の別荘にみられる乱石積みである（図31）。書斎（図32）・居間（図33）は、煉瓦積みの周囲に古典的な木製のマントルピースを有する。しかし各室の暖炉では、十分に暖をとることができず、火鉢を使用したという[13]。食堂の大きな薪ストーブが役に立ち、ゲストは食堂から離れなかった。

### ５）室内意匠にみる和風意匠

デントン・ハウスは暖炉のある西洋住宅ではあるが、特徴的な要素は和の意匠にある。１階の居間は、古美術を飾る空間として、床の間・違棚があった（図34）。洋風住宅に床の間・違棚を配する意匠がめずらしい。出入り口には襖障子を用い、照明、電気スタンドも障子をモチーフとした（図35）。障子風の電気スタンドは現在も同志社女子大学史料室に所蔵されている（図36・図37）。和の意匠が選択されたのは、デントン・ハウスが米国などの外国人をもてなす場として、洋風の生活様式のなかに和の要素を必要としたからであろう。デントンは、フェノロサやビゲロー等と交流があり日本美術に造詣が深かった。床・棚には、伊万里・九谷・柿右衛門・鍋島の皿と鉢があった。ゲストにコーヒーと菓子を出し、東海道五十三次を見せ、木版画の工程や生け花・盆石を実演したという[14]。前述した南側開口部の欄間、北側襖障子の欄間の木枠も一見すると西洋風であるが、詳細に検討すると大工が施工した日本の欄間装飾を想起させる。和洋が上手に調和した室内空間がデントン・ハウスの魅力である。

図12　居間
【客間。襖を開ければ食堂室に通じる。右側に広縁があり南前庭に面している。左側は床である。油壺のあるガラス箱、机、椅子セットは、デントン記念館三階の記念室に運ばれた。】

図13　居間北面　暖炉
【客間北壁面】

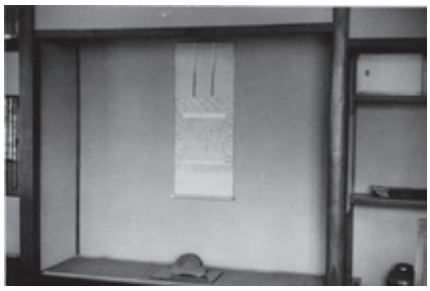


図14 居間北面　床の間
【客間北壁面】

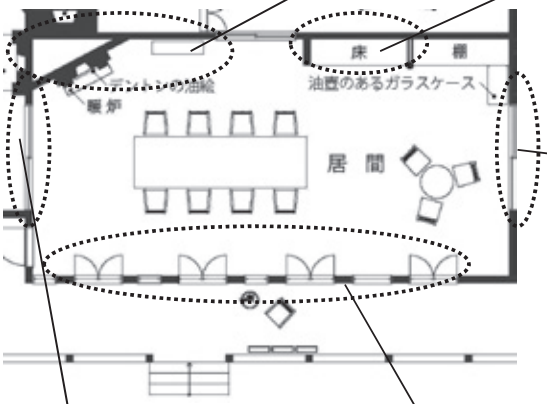


図15　居間と食堂の間
【客室から東面して食堂の間をのぞむ。】

図16　居間と書斎の間
（同志社社史資料センター蔵）

図18　居間南面
【客間南面の窓の木枠、模様がおもしろい。】

図17　居間と書斎の間 米国日本庭園使節団（1935年）
（同志社社史資料センター蔵）

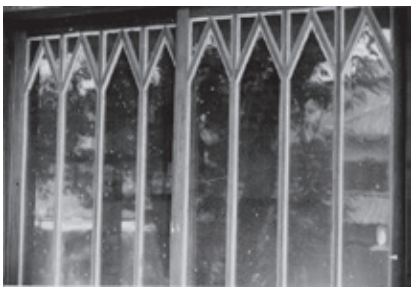


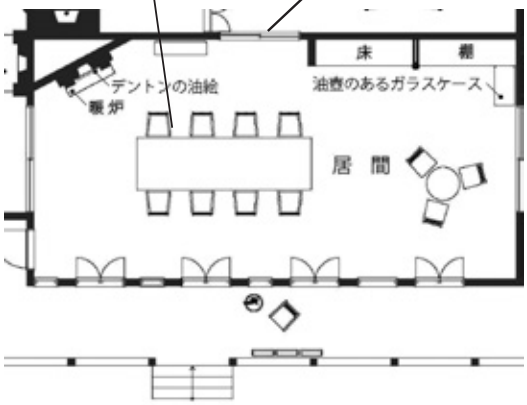
図19　居間南面（ゴシック風の装飾）
【窓枠の木組み装飾】

図20　居間南面（雲形の装飾）
【縁先出入口上の欄間木枠】

（図12～15・18～20　同志社女子大学史料室蔵）

図22　籐座の椅子
（同志社女子大学史料室蔵）

図21　居間北面出入り口　雲型の欄間
【客間北側の間の西に隣る襖開けると北の廊下に通じる】
（同志社女子大学史料室蔵）



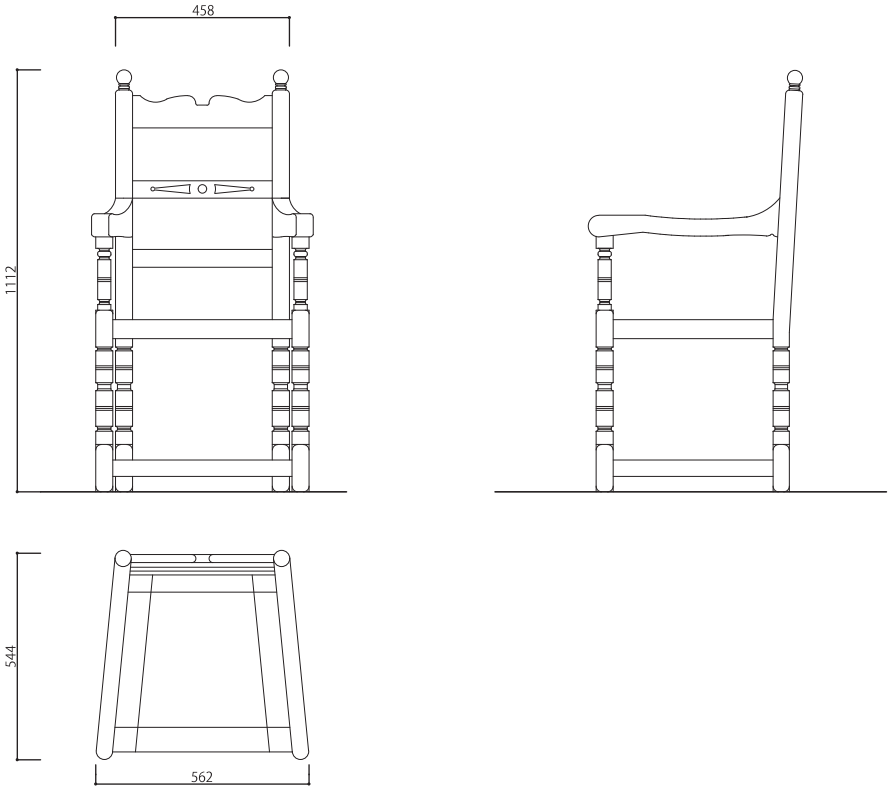




図23　籐座の椅子（2015年 8 月実測により作図）
（同志社女子大学史料室蔵）

図24　洋風のキャビネット
（同志社社史資料センター蔵）

図25　食堂東面
【食堂東北隅に置かれている食器棚きれいな九谷焼や染付の大皿や古風な模様入のコーヒー茶碗など一杯飾られていて来客の際や平常にもデントン先生はよく使用された。星名ヒサ先生が食事のみならず一切の面倒をみられた。】

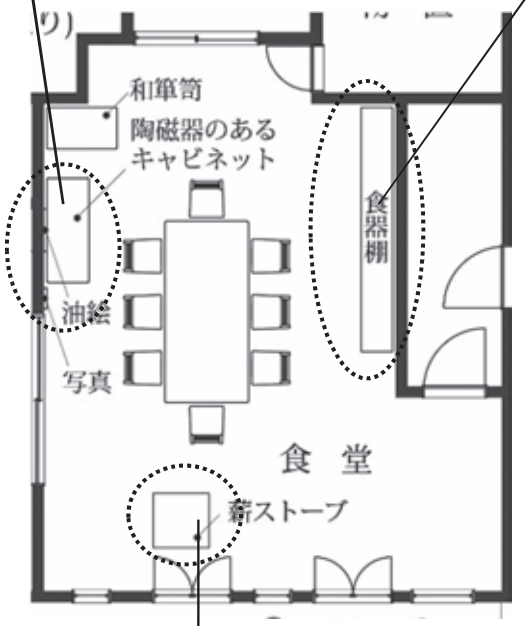


図26　食堂東面和風の戸棚
【食堂東北隅壁面に据えられていた。】
（図25～27　同志社女子大学史料室蔵）

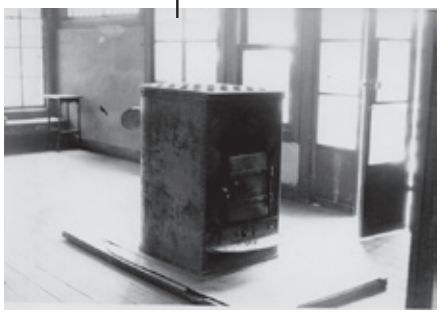


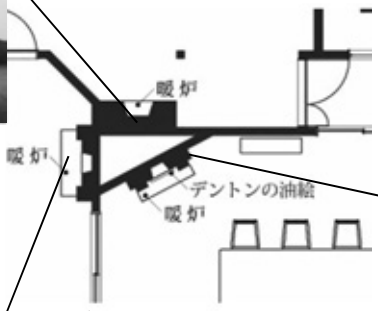
図27　食堂東面
【食堂の間の薪ストーブ高さは四尺以上と推定】

図28　場所不明写真（食堂北側か）
（同志社社史資料センター蔵）

図29　場所不明写真（食堂北側か）
（同志社社史資料センター蔵）

図30　場所不明写真（食堂北側か）
デントン先生最後の誕生日、1947年７月４日
（s,d, silfvast 提供）

図31　北側広間の暖炉
【デントン館北入口玄関突当り（南壁面）に設けられている暖炉（これはほとんど使用されなかった】




（暖炉の中央は構造が不明のため白抜きとした）

図33　居間の西北隅の暖炉
【食堂西隣の客間、西北隅にあった斜め向こう壁面のデントン先生の油絵と暖炉である。集会の際にはこの■暖炉はよく使われた。】

図32　書斎東面の暖炉
【客間の隣に板戸二枚に区切られて約四畳半位の板敷の部屋がありこの暖炉は板戸の北に隣壁面にある暖炉である。この部屋は西、南共出入口にガラス扉があって両方共縁先に出られた】

図34　居間北面違い棚
【客間東北隅の床の間、地袋と違い棚】

図35　米駐日大使グルーとデントン　於デントン・ハウス
（1939年11月24日）（同志社女子大学同窓会所蔵）
（図31～34　同志社女子大学史料室蔵）

図36　照明器具とスタンド
（同志社女子大学史料室蔵）

### 6）聞き取りによる使い方

1951（昭和26）年～1959（昭和34）年の居住者の方への聞き取りによると、1階のトイレは浴室の中にあり西洋式であった。子供達は勝手口、大人は玄関を使用し、入口で靴を脱ぎ、スリッパを使用していた。1階の書斎・居間は私的に使用することはなく、公的な空間と私的な空間が居間の壁で分けられていた。食堂は私的な場であった。居間（集会室）は、聖書研究会等の公的な空間として使用された。

## 2-3.　2階平面

2階の古写真は遺されていないが、デントン・ハウス改築時（1958年）の図面から、2階は大小8つの部屋があり、南面と西面にベランダが巡っていることが分かる。デントンの部屋は、F. B. クラップの著書によれば、台所の階段の上、2階の小部屋で、窓が一つ、衣類は壁のフックに吊るし、部屋いっぱいにベッドが置かれていた。昭和6（1931）年には食堂にデントンのベッドをおろした。F. B. クラップの著書から2階の居住者を抽出すると、表-1のようになる。住人は、台所に入ることを許可されず、ゲストを招く際は、自室か東の書斎を使用したという[15]。

デントン没後（1947）、昭和26年（1951）年以降、昭和26年～34年の居住者の方からの聞き取りによると、2階は1室のみ畳部屋があったとされる。畳部屋は元々女中部屋として造られた可能性が高い。ベランダにも好みのもの（ミシンや机等）を置いて、活用していたとされる。昭和26年～34年の居住者の方の記憶を手がかりとした図面を掲載する（図38）。復原図では、デントンの居室を階上の部屋に想定した[16]。

## 2-4.　現存品

デントン・ハウスの遺物として、階段の手摺が現存している（図39）。北側の主要な階段とは異なることから（図40）、調理場から2階へ至る階段の手摺であったと推察される。一本の竹による装飾のない簡素な意匠である。デントンと縁のある京都市の昭和初期の個人宅でも階段に同様の竹製の手摺がみられた。また、デントンハウスの表札がある（図41）。

家具は、12点が現存する（表-2）。同志社女子大学史料室

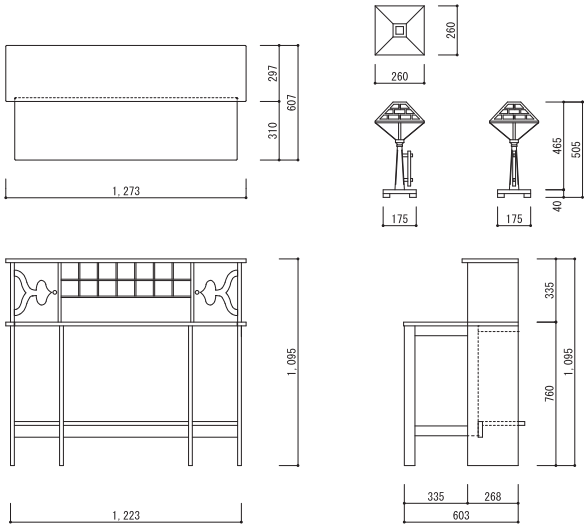



図37　照明器具とスタンド
（2015年8月実測により作図）

表-1　デントンハウスの居住者

| 年代 | | | 居　住　者 |
|---|---|---|---|
| 1909 | 明治42年 | 建設 | |
| 1917 | 大正6年 | | マドリン・ウォーターハウス<br>ミス・クラップ<br>メアリー・G・バートン |
| 不明 | | | ミス・ヘンリカ・ビーチ<br>ミス・バーヴェル<br>ミス・ウールバードン<br>ミス・バーサ・ボズビシェル<br>ミス・ヘレン・シーモア<br>ミス・チャドボーン<br>ミス・ヴェイル<br>ミス・レスリー<br>シェルドン・ジャクソン姉妹<br>ミセス・ルーシー・タッパン・スコット<br>ミス・ブランチ・スティーブンス<br>ミス・アリス・アンダーソン |
| 1951 | 昭和26年以降 | | 同志社にゆかりの方々のご家族、外国人教師等 |
| 1958 | 昭和33年 | 一部撤去 | |
| 1960 | 昭和35年 | 消失 | |

表-2　デントンハウスの現存家具

| NO | 家具の種類 | 所　蔵 |
|---|---|---|
| 1 | 籐座 | 同志社女子大学史料室蔵 |
| 2 | カウチ | 同志社女子大学史料室蔵 |
| 3 | 折り畳み机（障子スタンド） | 同志社女子大学史料室蔵 |
| 4 | 引出し机 | 同志社女子大学史料室蔵 |
| 5 | 鏡台付箪笥 | 同志社女子大学史料室蔵 |
| 6 | 箪笥 | 同志社女子大学史料室蔵 |
| 7 | 丸テーブル | 同志社女子中学･高等学校蔵 |
| 8 | 丸テーブル用の椅子 | 同志社女子中学･高等学校蔵 |
| 9 | ロッキングチェア | 同志社女子中学･高等学校蔵 |
| 10 | 小机（軽井沢彫） | 同志社女子中学･高等学校蔵 |
| 11 | 椅子 | 個人蔵（同志社女子大学史料室に寄贈） |
| 12 | テーブル | 個人蔵（同志社女子大学史料室に寄贈） |

## ２階平面図

0　5　10　15　20 尺　N

２階部分は古写真が現存しないため、戦後にデントンハウスに居住した方々の聞き取りを基に、家具等を配置した。
F.B. クラップ『ミス・デントン「同志社の宝」と呼ばれた女性の 60 年』(同志社女子大学同志社同窓会、2007 年)の記述によれば、デントンの居室は、台所上の階段の上にある小さな部屋で、窓が一つであった。他の居室は、外国人教師が使用した。

図38　デントン・ハウス２階　復原図

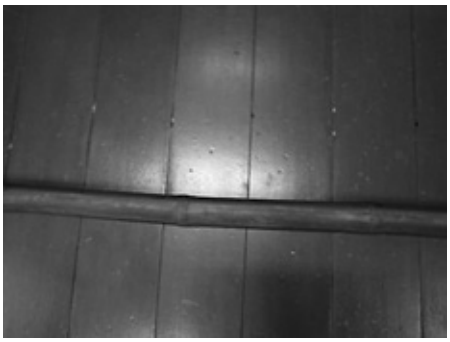


図39　竹製の階段手摺

図40　北側階段
【北出入口玄関広間の北隅の階段】

図41　デントン・ハウス　表札
1939～40年ころ米人 Waren Gilbertson が製作。
同氏は1939年春より40年秋まで五条坂・河井寛次郎に入門し陶芸を学んだ。（史料室解説から）

図42　カウチ

（図39～42　同志社女子大学史料室蔵）

所蔵のカウチは、19世紀半ばに米国東部で流行したQueen Anneあるいは Chippendale のスタイルと考えられる（図42）。同志社女子中学高等部には、軽井沢彫の机が現存している。個人の御宅には机・椅子がある[17]。デントン・ハウスは、廊下、食堂や書斎までもが、西洋人が置いて行った奇妙なテーブルやトランク、椅子、箪笥で埋まり、日本に来たばかりの西洋人が適当なものを持ち帰ったとされる[18]。現在、遺品として現存する家具は、多様な種類がある。これらは、来日した西洋人達に使用されたものの一部であったことが窺える。

## おわりに

同志社女学校は、開校当初は、教室、学生・宣教師の住居が一つの建物内にある寄宿舎であった。生徒数の増加に伴い、教室・学生寮・宣教師館が別に建設された。そのなかで、宣教師の住居兼ゲストハウスであるデントン・ハウスが建設された。

デントン・ハウスは、明治初期の古材で建設された木造洋風建築であり、さらにベランダを配するコロニアル様式の住宅である。その内部空間は、中央の洋風の居間に床・棚を配して古美術を飾った、和洋が融合する特質すべき意匠であった。京都市において、新島旧邸・旧ベリー邸とともに、近代住宅史の変遷を考察する上で重要な建築である。また、デントン・ハウスは、近代京都における宣教師・外国人・同志社が使用する社交の場であり、日米における文化交流の重要な拠点であった。西洋住宅のなかに日本の意匠を巧みに織り交ぜたその建築空間は、日米の文化の融合が建築として示された貴重な実例である。1960（昭和35）年に取り壊された後もデントン・ハウスの古写真・遺品・家具は、ゆかりの方々の手によって伝えられている。それらの資料の検討や家具の詳細な報告は、別稿に改めたい。

〈付記〉本稿は、中西美香「近代女学校寮を通してみた住生活の洋風化 ── 同志社女学校、デントン・ハウスを中心に ──」（2014年度同志社女子大学生活科学部人間生活学科卒業論文）を基に、その後の知見を加えてまとめた。本論文を仕上げるにあたって、本学坂本清音名誉教授にご尽力を賜った。

本学史料室島口寿美氏、史料室の皆様、同志社社史資料センター小枝弘和氏、同志社女子中学高等学校元校長森一郎氏、大下道氏、末光百合子氏に多くのご高配を賜った。史料室蔵家具の実測・作図にあたっては、2014年度人間生活学科住文化研究室３年次生13名、笹川敦史・今倉智美氏にご尽力いただいた。広島大学大学院水田丞助教には近代建築史の立場からご教示をいただいた。

本稿は、2015年度同志社女子大学個人研究「同志社の建築資料を通してみた近代日本住宅史の展開 ── デントン・ハウスの復原を中心に ──」の成果による。

## 注

1）太田博太郎編『住宅近代史』雄山閣、1969年（坂本勝比古「異人館」）

2）坂本清音・林貞子『同志社女子大学寮の100年』同志社女子大学史料室、2006年。

3）２）前掲書。P.16 日本ミッションの年会記録（1877年６月18日～22日）

4）F. B. クラップ『ミス・デントン「同志社の宝」と呼ばれた女性の60年』2007年等。

5）４）前掲書。デントン・ハウス訪問客の芳名録には、内外からのデントン・ハウス訪問客が記される。

6）コロニアル式は基本的に南洋植民地（気候）に対応した住宅様式であり、周囲（前面だけでなく３面）に部屋の延長としてのベランダを持つ（『建築大辞典』）。広島大学大学院水田丞助教からは、以下のようなご教示をいただいた。デントン・ハウスと新島旧邸は、白木の角柱が一階から二階まで通してあることに特徴がある。長崎や神戸の洋風住宅はペンキ塗の柱で、上下階の境に水切りやベランダの床で切られている。一階の床が板敷きであることも珍しい。外国人教師の住宅としては、熊本洋学校教師館ジェーンズ邸（県指定、明治４年）、東京の明治学院、仙台の東北学院等がある。

7）４）前掲書。

8）１）前掲書。

9）１）前掲書。

10）４）前掲書。

11）４）前掲書。

12）同志社女子大学2015年度四年次生松下直子氏の卒業論文として進めている。本稿の執筆の過程で、松下氏にご教示を得た。

13）４）前掲書。

14）４）前掲書。

15）４）前掲書。

16）『ミスデントン』デントン記念誌編纂委員会、1953年

によれば、デントンの居室は「二階の東北隅の物入室に等しい六畳たらずの小室、窓は唯東一方だけ、脚のわるい先生の二階住ひの不自由さ。室には敷物もなく、そまつなベッドが一つ、片隅に棚が備え付けてある。知友の若干の写真額がたゞ一つの飾り、冬とて暖房はない、夏は蚊帳かわりの網戸、それも先生の手でつぎはぎだらけのが通風路の東の窓にはめられている、壁には新聞紙が張ってあった。」とある。本稿におけるデントンの部屋の復原図では、9.28㎡、京間では5.09畳、江戸間計算では6畳になる。窓も東一方にあり、デントンの居室として想定することができる。

17）本論文執筆中に本学史料室にご寄贈いただいた。

18）4）前掲書。

## 主な参考文献


・同志社社史資料室『創設期の同志社 ── 卒業生たちの回想録 ──』同志社社史資料室、1986年

・宮下千代『寮の歩み ── 明治・大正・昭和 同志社創立百周年記念』1971年

・同志社女子大学学報編集委員会編『しばくさ 同志社女子大学報 第5号』同志社女子大学、1966年

・同志社同窓会他編『同志社創立九十周年記念誌』同志社同窓会、1966年

・同志社女子大学史料室「同志社女子大学史料室 開設記念展目録（創設期の同志社女学校・M. F. デントン遺品）」1994年

・中村貢『デントン先生』同志社女子大学、1975年

・小野恵美子『日米の懸け橋 日本の女子教育に捧げたデントンの生涯』大阪書籍、1988年

・江上幸子『無心のときを求めて ── 96年の記録』青山社、2005年

・『同志社女子大学125年』編集委員会『同志社女子大学125年史』同志社女子大学、2000年

・同志社女子大学英文学会編『Asphodel 第49号』同志社女子大学英文学会、2014年

・『The Roots 築の章 ── 建物編 ──』同志社女子大学、2015年

・太田博太郎編『住宅近代史』雄山閣、1969年（坂本勝比古「異人館」）。

・藤谷陽悦・内田青蔵『図説　日本近代住宅史』学芸出版社、2008年。

・中村圭介『文明開化と明治の住まい ── 暮らしとインテリアの近代史上』理工図書、2000年。